「芸術の里」プロジェクト第1号

「ここに住みたい」

東京から今春移住

河辺雄和商工会

写真家・遠山さん一家

秋田市河辺に今春、東京在住のフリー写真家が家族4人で移住する。音楽CDのジャケットや広告の写真を撮ってきた遠山桂太郎さん(48)＝宮城県大崎市出身。東日本大震災を機に生き方を見詰め直し、東京を離れ自然豊かな土地で暮らすことを決めた。人口減が進む中、芸術家を呼び込むことで地域活性化を目指す河辺雄和商工会のプロジェクトの移住者第1号となる。

昨年12月27日、遠山さんは住居探しのため、会社員の妻幸子さん(49)＝横手市出身＝と秋田市河辺を訪れた。商工会とNPO法人・秋田移住定住総合支援センター（秋田市御所野）から紹介されたのは、水田が広がる集落に立つ築約20年の空き家。「新築がいいわけじゃない。広いし、ロケーションも完璧」。一部を改修して住むつもりだ。

昨年9月、首都圏から地方への移住情報を提供する「ふるさと回帰フェア」が都内で開かれ、夫婦で参加した。本県ブースに足を運んだ際、河辺雄和商工会が本年度から始めた「芸術の里かわべゆうわ」プロジェクトを知った。

遠山さんは「ここに住みたい」と直感的に思った。幸子さんが県人で自身も東北の出身。秋田を身近に感じていたこともあった。

遠山さんは美容師を経験した後、写真を学び、1993年にフリー写真家として独立。有名歌手やスポーツ選手らを相手に仕事をしてきた。住まいは渋谷区のマンション。人、モノ、情報が集まる都会生活を享受してきた。

震災後、東京電力福島第1原発事故による放射能汚染への関心が高まり、環境をテーマにした写真を撮る機会が増えた。

自然豊かな土地で暮らしたい。小学4年の長男と小学1年の長女のためにも、そうした方がいい―。そんな思いが次第に強くなっていった。

フェアをきっかけに昨年10月、家族4人で河辺を訪問。商工会職員らの出迎えを受け、車で地域を案内してもらった。「皆さんの熱意に感激した」と幸子さん。東京育ちの2人の子どもも河辺を気に入ったという。12月には住む家を決めた。

住居探しのため秋田市河辺を訪れ、河辺雄和商工会の佐々木義文事務局長（右）から説明を受ける遠山さん夫婦＝昨年12月27日

遠山さんは今後も写真家の仕事を続け、必要に応じて上京する予定。「役に立てるのであれば、秋田でも写真を撮っていきたい」。野菜の無農薬栽培にも挑戦しようと考えている。幸子さんは勤務先のIT企業を辞め、秋田で仕事を探す予定だ。夫婦とも、子どもと過ごす時間を今まで以上に大切にしたいと思っている。

「東京ではできないことが、ここに住めばできる。何の不安もないし、楽しみで仕方ない」。遠山さんの気持ちは既に、新生活に向いている。

（内田隆之）